

# On 'Tales of Time Rabbit' : Adventures of a 'No Ordinary Rabbit'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4254">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4254</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「ティム・ラビットのお話」をめぐって ——「ちょっと特別なうさぎ」の冒険——

中野節子

高い山や深い森の代わりに、なだらかに続く緑の丘陵を特徴とするイギリスの田舎の自然、そんな田園の風物を背景にして、数々の物語を書き綴った女流作家アリソン・アトリー (Alison Uttley: 1884-1976) には、彼女の名を一躍高めることになった代表作「グレイ・ラビット物語」シリーズ ('Tales of Little Grey Rabbit': 1929-75) 34冊の他に、もう一つのうさぎの物語がある。1937年から1964年にかけて出版された5冊の本の中に収められた57話のお話の中で、「ちょっと特別なうさぎ」 ('No Ordinary Rabbit') と紹介される主人公の可愛いうさぎの坊やティム (Tim Rabbit) は、ビアトリックス・ポター (Beatrix Potter: 1866-1943) の生んだ、絵本の世界で活躍する悪戯坊主のピーター・うさぎ (Peter Rabbit) と並んで、沢山の子どもたちに親しまれる幼年童話の人気者である。

### 1. ティム・ラビットの登場

The wind howled and the rain poured down in torrents. A young rabbit hurried along with his eyes half shut and his head bent as he forced his way against the gale. He tore his trousers on a bramble and left a piece of his coat on a gorse-bush. He bumped his nose and scratched his chin, but he didn't stop to rub himself. He hurried and scurried towards the snug little house on the common where his mother was making bread.

( — *The Adventures of No Ordinary Rabbit*, p. 9.)

吹き荒れる風、降りしきる雨の中を、まっしぐらに母親の持つ気持ちのよい家へ駆けて帰ってくる小さなうさぎ、それこそこの一連のお話の主人公ティムである。

母さんうさぎのラビット夫人 (Mrs Rabbit) は、おいしいパンを焼いている最中。「何かが追いかけてきたんだ。」(‘Something came after me.’) とおびえる息子の話から、その正体が、風であることをつきとめる。「ふうー、うー、うー」(‘Whoo-oo-oo.’) と唸り声をあげ、体の周りをぐるぐる回り、上着をはぎ取ろうとし、はてはズボンまでをももぎ取ろうとする困った代ものだが、「風は友だちだから、こわがらなくってもいいのよ。」と教える。翌日、小さな石でできたフライパンで、パンケーキを焼いているラビット夫人のもとに、息せき切って戻ってきたティム。沢山の手から硬い石を投げつけ、大きくて黒く、「しゅっ、しゅっ、しゅっ」(‘Whissh-ssh-ssh!’) と唸るものの正体が、雹であることをつきとめると、「雹がふると、空気がきれいになって、うさぎの体にはいいんだから、こわがらなくってもいいよ。」と教える母さん。次の日、草原で美味しい桜草を食べていたティムは、又もや一目散に家に逃げ込んできた。干し葡萄入りのティーケーキを炙っていたラビット夫人は、息子の話から、とても大きく、背も高く、きらきら輝く短刀を幾つも投げつけ、眩しい光で眼を潰し、「ごろ、ごろ、ごろ」(‘Roo-oo-oo-oo-oo-oo-oo!’) と吠えるものの正体が、雷と稲光であることを見極め、恐れる必要が無いことを教えるのであった。しかしこの若いうさぎのティムが、人生(?)の最初の教訓を学ぶ日がやってきたのである。

次の日、羊歯の草むらの中に座り込んで、気持ち良くうとうとしているティムの方に、はしゃいで跳んでくる四本足の不思議な生きものがあつた。機嫌良く、陽気なその動物をすっかり気に入って、一緒にかくれんぼうをしたり、家に招待してもいいなとまで思うほどに親近感を持ったティムなのだが、風や木々や雷や雹から、急いですぐに家に帰るように追い立てられる。野性りんごのタルトを作っていたラビット夫人は、白い体、優しい眼、長い耳と光る歯を持ち、「わんわん、わんわん」(‘Bow-wow! Bow-wow!’) と吠える動物の正体が犬だと知る。そして恐ろしそうに声を低めた母さんは、「犬には気をおつけ、ティム。おまえはあの尖った歯と、ぱたぱた跳んでくる前で殺されたかもしれないんだよ。」と言うのだった。そしてティムの登場を告げるこの最初のお話「ティム・ラビット」(‘Tim Rabbit’) は、次のように結ばれている。

So the little rabbit sat on his stool in the chimney corner, warming his

toes by the fire, whilst he learned his first lesson:

“Crouch among the heather,  
Never mind the weather,  
Forget it altogether.  
Run from a dog, a man, and a gun,  
Or your happy young life will soon be undone.”

( — *ibid.*, p. 18.)

## II. 「ちょっと特別なうさぎ」ティム

どんな親にとっても、自分の子どもは特別な存在であって、とうていその他一般の子どもとは一緒にできないと思っているに違いない。しかしその一方で、この特別な我が子にも、平凡な幸せが味わえる、極普通の一生を送ってもらいたいとも願う矛盾した思いもあることは事実で、常にその両極を行ったり来たりして、一喜一憂しているのではないだろうか。ティムの母親ともその例に漏れず、様々なところで、その複雑な自分の気持ちを吐露している。「特別なうさぎ」としての認識が、初めて言葉化されているのは、「どんなふうにしてティムが王子さまとなったか」(‘How Tim Rabbit became a Prince’) というお話の中でのことである。二十枚の寝具を通して、下にある三つぶの豆が邪魔になって眠れなかったという繊細さをもつ、正真正銘のお姫さまのお話をよく知っていたティムは、シーツのしわが気になって眼が覚めてしまっていた夜に、自分も本物の王子さまに違いないと思ひ込む。

“You are only an ordinary little rabbit, Tim, living in an ordinary little house, on an ordinary common,” laughed Mrs Rabbit.

( — *ibid.*, p. 63.)

と母さんは、笑ってとりあおうともしない。

けれどある日のこと、畏にかかって危うく捕まりそうになった叔母のライザを、機転と勇気をもって助け出し、ティムが家に戻って来たときにはこの母さんも、

When at last he reached home, and told his mother his adventure, she hugged his little head in her paws.

“You are a Prince of Rabbit, now,” said she, “and no ordinary rabbit at all.”

( — *ibid.*, p. 69.)

と深い感慨をもって、本物の王子さまとなって帰ってきた息子ティムを認めるのである。

その後ティム自身も、次第に「僕は特別なうさぎなんだ。だからみつばちを飼って見ようと思うんだ。」(“I’m no ordinary rabbit, and I’m going to keep bees, . . .”)などと主張するようになってゆく。しかし、公然と「ちょっと特別なうさぎ」としてのティムの存在が証明されるのは、1945年に出版される『ティム・ラビットの冒険』の中に収められた、「ティム・ラビット庭を見つける」(“Tim Rabbit finds a Garden”)というお話の中でのことである。

ある夏の日、野原を陽気な足取りでやって来たティムは、今まで訪れたこともない奇妙な場所に出くわした。この特別な日に、ティムが彼の散歩の限界である遠い野原との区別となった塀に近づき、ごつごつした黒い石の近くに生えた羊歯をそっと押し開くと、そこには隠れた入口があり、中に続く一本の道が現れたのである。恐ろしい異かもしれないと、用心深くあたりの様子を窺うティム。しかし深く繁ったわらびの森の梢には、夏の青い空が広がり、蜜蜂の忙しそうな羽音と蝶の羽根のひらめきがあるばかり。勇気を奮って、好奇心一杯のこの若いうさぎは、中に飛び込んでみた。

There was a tiny path like a ribbon, and he trotted along it, eager to find where it led. Soon he left the bracken behind and came to a small sunny glade. He raced up and down the short turf with little snorts of joy. It was a garden of wild flowers set in the midst of the bracken. The circular dell had walls of green around it, and inside all the flowers of summer seemed to have pushed their way. Tim had never seen such an enchanting place.

( — *Adventures of Tim Rabbit*, p. 18.)

この「魅惑の場所」(‘an enchanting place’)には、野性のゼラニウム、デイジー、西洋スイセン、シモツケソウ、カラスマエンドウ、アカバナリハコベ等の花々が咲き乱れ、中央にはスイカズラと野バラが巻きついて花を咲かせている一本の木の実の樹があり、その樹の根元には、真紅の苺が育っていた。すっかりこの場所が気に入ったティムは、ここを自分の庭にすることに決め、座り込んで好物の苺、そして庭の縁をつくっているきのこを食べるのだった。やがて、「ここは駄目だよ」(‘But not this one.’)と盛んに警告するコマドリの注意をも無視して、うとうと心地好い眠りについた。

やがて虫の羽根のような囁き声、何かにつつかれる感触で眼を醒ましたティムが見たものは、

... All round him were little people, leaping, skipping, dancing among the flowers. They had round faces and tiny pointed ears and glittering bright eyes and small scarlet mouths. Their clothes were many-coloured, made of silken petals and cobwebs and scraps of feathers. Their hair was gold as sunlight. Some swung in the honeysuckle streamers, some climbed the ladders of purple vetch others leaped in the nut tree and then dropped light as thistledown upon Tim's head. Tim was delighted with such charming little folk, but he kept very still, waiting.

( — *ibid.* pp. 20~1.)

しかしティムの感じた親しい気持にもかかわらず、招かれもせずに自分たちの領域に侵入して、傍若無人に飲んだり食ったり、果てはベッドで勝手に眠り込んだりしたティムは、彼らに散々痛めつけられ、永遠に捕らわれの身となって、馬の代わりにこき使われる運命にあると告げられる。ティムは陽気に、「あなたたち、妖精なんでしょう?」と言う。

‘Fairies!’ they piped in their shrill thin voices.

‘What do you know of fairies? There aren't any, are there? Nobody has ever seen one and gone away to tell the tale. They don't exist. No! No! No!’

‘I've heard about fairies from my mother,’ said Tim, slowly. ‘My great-grandmother once met a fairy.’

‘His great-grandmother!’ they mocked.

‘The fairy was fast in a spider’s web, her wing was torn and my great-grandmother set her free,’ added Tim.

( — *ibid.*, p. 22.)

けれど彼らは嘲笑するばかり。さしものティムも恐怖を感じ始めたとき、ユリの花のように美しく、髪に金色の宝冠をのせ、手に花の笏を持ち、露と太陽の光線でできたドレスをまとった妖精の女王が登場する。ティムを永遠に捕らえておくと主張する彼らに、女王は言う。

‘No! Not Tim Rabbit! He’s no ordinary rabbit! His great-grandmother was a friend of mine. She saved me once. I promised to keep an eye on all her descendants. I’ve been taking care of Tim ever since he was born.’

( — *ibid.*, p. 26.)

こうして「特別なうさぎ」であることを証明してもらったティムは、数々の贈り物とともに、帰りを待つ母さんうさぎのところに戻された。物語は次のように結ばれている。

Tim and Mrs Rabbit spent the evening looking at the fairy gifts. They made the thyme tea and drank it. They listened to the music of the asphodel. They stuffed a pillow with woodruff flowers. They tossed the blue pence in the air and watched them float like bright balloons. They bathed their eyes with eyebright lotion, and they made necklace with the daisies.

Although Tim went many a time to the fields, he could never again find that doorway in the wall that led to the enchanted garden of the fairies.

( — *ibid.*, p. 28.)

### III. ティム・ラビットの仲間から一人間の大人たち

優しい母さんうさぎのラビット夫人と、彼女の信頼を一身に集める頼もし

い父さんうさぎのラビット氏 (Mr Rabbit) の間の一人っ子ティムには、従姉妹のジェイン (Jane) やジョナサン先生 (Old Jhonasan) をはじめとした様々な小動物の仲間がいる。そして畑の真ん中で、孤独な生活を余儀無くされている案山子だとか、持ち主の少年の病気で追い出されてしまった影法師、そして冬になると猛威を奮って彼らを悩ませるジャック・フロスト (Jack Frost) などといったちょっと変わった友人もいるのである。そんな仲間たちの輪の中で、日常の生活を営んでいるティムには、ごく僅かな例外として、何人かの人間たちもいた。乳母車から這い出して来た赤ん坊とか、大きな雨傘の下から通りがかりのティムに気軽に声を掛けてくる農家の小さな男の子ジョン (Jhon) の他に、最初の物語で学んだ教訓「犬と人間と銃には近づくな」という禁忌を破って、ティムが初めて親しく交わる人間の大人の登場は、最後の作品集である 1964 年版の『ティム・ラビットの 12 のお話』の中の、『ティムと幸せな老紳士』('Tim and the Happy Old Gentleman') のことである。

One day Tim Rabbit was trotting about on the common, looking for what he could find, peering at the grass, peeping at the sky, staring at the thin white moon and the clouds scudding before the wind. Suddenly something rushed past him, and it wasn't Sam Hare, and it wasn't the weasel or the fox or the pheasant. Tim was puzzled by this queer thing, which was brown and oddly shaped and hollow. It ran along without any legs and it bowled like a hoop. Tim ran after it, but when he stooped to pick it up the wind blew it again.

( ——— *Tim Rabbit's Dozen*, p. 7.)

この不思議なものの正体は帽子であった。やっとのことで、風の協力を得て帽子を捕まえたティムのところへ、息せき切ってやって来たのが、青い眼、白い髪、血色のよい薔薇色の頬をした老紳士である。お茶にと家へ誘われ、老紳士の後をついてやって来たティムは、召使の女中ロージー (Rosy) にも可愛がられ、美味しいお茶と大好物のレタスの葉を御馳走になり、手作りのケーキと母さんのためのプレゼントの薔薇の花束をお土産に貰って、帰ってくる。ティムを見送る、人間の大人たち二人の最後の会話が興味深い。



“Good-bye, Tim. Come to see me tommorow,” said the old gentleman. “Take care of yourself, Tim. Don’t go into danger.”

“No, sir,” said Tim. He waved his paw and ran swiftly away. The old gentleman sighed and turned to Rosy. “What a privilege to meet one of those fairy folk,” said he.

“He’s no fairy. He’s real,” said Rosy. “I knew about him when I was ever so little. He’s real as you and me.”

“Are we real?” asked the old man, and he went to his room to think about it.

( — *ibid.*, p. 13.)

その後、しばしばこの老紳士とティムは交流をもつ。ティムが助けてあげた、クリスマスに食べられてしまいそうになっていた鶯を保護してもらったり、またあるときは自分が捕まって、危うくペットにされそうになったところを、この老紳士に買い取ってもらったりもするのである。そして女中のロージーは、ティムから七色に輝くダイヤモンドの指輪を貰って、この「特別なうさぎ」との遭遇の記念としたりする。彼女にとって、長い間このティムは、幼年時代に繰り返し聞いたお話の中の英雄であったのだから。

#### IV. 「ちょっと特別なうさぎの物語」が世にでるまで

「かわいそうな小さな坊や、こんなにあっちこっちと駆け回って、その足もすっぱり疲れたことだろう。」(‘poor little chap, his legs are so tired running up and down.’) とアトリー自身が日記の中で嘆いているように、この一風変わったうさぎティムが世に出るまでには、ロンドンの数々の出版社と作者アトリーが住んでいたバッキンナムシャーの小さな村ペンとの間を何回も往復しなければならなかった。この物語が最初に書かれたと思われる1933年には、既にA・アトリーの名前は「リトル・グレイ・ラビット物語」の作者として広まっており、ハイネマン社から代わってこのシリーズを新たに出版しようとしていたコリンズ社は、活躍する主人公は男の子のうさぎになっているとはいえ、同じよううさぎ物語を平行して出そうとはしなかったからである。作品の独創性に自信を持っていたアトリーは、考えつく殆ど

全ての雑誌社や出版社に原稿を持ち込むのだが、何れもことごとく失敗する。しかしこの新しい主人公ティムの登場は、思わぬところから現実のものとなった。彼が活字を通してではなく、耳から入ってくるラジオ放送の音声を通して世に出ることになったことも興味深い。

1934年8月、「グレイ・ラビット物語」の最初の4話がBBC放送から流された。この成功に続いて、1935年3月そして12月と、彼女の小さなお話が電波に乗って届けられる。そして翌1936年の2月、BBC放送がティムのお話の5つを選んで放送してくれることになったのである。多くの出版社から断り続けられていた後だけに、アトリーの喜びは一入であったらしく、「一つの業績ともなり、ちょっとした収入にもなる。とても嬉しい。」（‘... a feather in my cap and a cheque in my pocket. I was delighted.’）と日記に記している。そして翌1937年11月、以前から彼女の田園エッセイ集と妖精物語集を出版していたフェイバー社から、最初のティムの物語集が、『ちょっと特別なうさぎの冒険』という書名で出版されたのである。アレック・バッケルズ（Alec Buckels）の挿絵入りの208ページの本で、中には18話が収録されていた。これは昔から純文学書の出版で知られたフェイバー社の、最初の動物物語集となった。アトリーのもう一つの動物ファンタジーの傑作、元気なぶたの坊やを主人公にした「サム・ピック物語」（‘Tales of Sam Pig’）シリーズも、やがてこの社から世に出ることになるきっかけをつくったことでも、まさに画期的な書となったと言えよう。本の評判は上々であった。1937年12月25日の「タイムズ文芸付録」（‘The Times Literary Supplement’）は、「7歳以下の子どもたちのための格好な物語である。10歳以下の者なら馬鹿にしたりはしないであろうことも確かである。」（‘The right type of tale for under seven, perhaps under ten will not despise them indeed.’）と評価し、又同年11月28日の「オブザーヴァー」（‘The Observer’）でも、「挿絵をながめたりする余裕を持ちながら、物語は完璧に進められている。」（‘With pauses to look at the pictures, the tale goes perfectly.’）と名ストーリーテラーとしてのアトリーの手腕を高く評価している。

こうして「ティム・ラビットのお話」シリーズは、続く1941年に最初の本からの10話を再録した『ティム・ラビットの10のお話』（*Ten Tales of Tim Rabbit*）が、そして1945年には、ケネディー（A. E. Kennedy）の挿絵での12話が収録された『ティム・ラビットの冒険』（*The Adventures of*

*Tim Rabbit*) が、また 1959 年に同じケネディーの挿絵での 15 話が入った『ティム・ラビットと仲間たち』(*Tim Rabbit and Company*) が、そして 1964 年にはシャーリー・ヒューズ (Shirley Hughes) の挿絵入りの 12 話が収録された『ティム・ラビットの 12 のお話』(*Tim Rabbit Dozen*) と、計 5 冊の物語集が出版されてゆく。

## V. 二匹のうさぎの坊や——ティムとピーター——を比較して

うさぎの坊やの物語と言うとすぐに思い浮かんでくるのは、ハーフトーンの色調を使った爽やかな画面に描かれた、愛らしいうさぎたちの活躍する B. ポターのピーター・ラビットのお話であろう。1902 年に出版された『ピーター・ラビットのお話』(*The Tale of Peter Rabbit*) をかわきりに、ポターは全部で 23 冊の動物を主人公とした絵本を出版して、一躍動物ファンタジー作家としての名声を確立する。そのうち、うさぎが主人公になったお話は、1904 年のピーターの従兄弟が活躍する『ベンジャミン・バニーのお話』(*The Tale of Benjamin Bunny*)、このベンジャミンと結婚しピーターの姉妹フロプシーの子どもたちの活躍する、1909 年出版の『フロプシーの子どもたちのお話』(*The Tale of the Flopsy Bunnies*) という、ピーター・ラビットとその親戚のうさぎたちが主人公となった物語 3 冊と、名前がない二匹のうさぎ—悪いうさぎと行儀のよいうさぎ—たちの物語『こわいわるいうさぎのお話』(*The Story of A Fierce Bad Rabbit*, 1906) との合計 4 冊の物語である。いずれも毎ページに作者であるポター自身の挿絵が入り、掌にすっぽりと収まってしまう小型絵本に仕上がっている。それに対して、アトリーのティムのお話は、前述の如く 3 人の画家の挿絵は添えられてはいるが、あくまでも耳から入ってくる言葉が主体となった物語りの本であることが分かる。視覚を通してメッセージを伝える絵本作家ポターの仕事と、語りの手であった童話作家のアトリーの違いが明確にされるころではなかろうか。読み聞かせをねらったベッドタイム・ストーリーとしてのティム・ラビットのお話の魅力は、幼い子どもたちの文学として今もその輝きを失うことはない。いささか辛辣で、ぴりっと辛口のピーターのお話に対して、ティムの方はあくまでも優しく、あたたかな家庭を背景にした、善意と好意に溢れた田園物語に仕上げられていることも、その特徴の一つである。こうした明るく幼年文学を、たっぷりと聞いて育つイギリスの子どもたちの幸せがひしひしと伝

わってくる。どんなに怖いことに遭遇し、心臓が止まるような冒険をしても、いつでも帰ってこられる場所を持つ元気な男の子うさぎのティムの物語が、小さな子どもたちの成長に与える影響の大きさを、あらためて感じさせられるからである。

ティムと母さんうさぎのお話は、何度読み返しても心を暖かくする「魅惑の場所」、やがては巣立たねばならない至福の子ども時代を象徴する優れた物語となっている。

## Bibliography

( 'Tales of Tim Rabbit' )

### A.

I *The Adventures of No Ordinary Rabbit*, illustrated by Alec Buckels  
(London, Faber & Faber Ltd., 1937).

1. Tim Rabbit
2. Slipper-Slopper
3. Tim Rabbit and the Scissors
4. Tim Rabbit and the Weasels
5. Tim Rabbit's Bad Day
6. How Tim Rabbit became a Prince
7. Tim Rabbit's Luck
8. Tim Rabbit and the Scarecrow
9. How Tim Rabbit kept Bees
10. Tim Rabbit's Window
11. Tim Rabbit breaks his Window
12. Tim Rabbit flies a Kite
13. Tim Rabbit and the Magpies
14. Tim Rabbit at the Fair
15. Tim Rabbit's Umbrella
16. Tim Rabbit hunts for the Moon
17. Tim Rabbit's Christmas-Tree
18. Tim Rabbit and Jack Frost

II *Ten Tales of Tim Rabbit*, illustrated by Alec Buckels,

(London, Faber & Faber Ltd., 1941).

[Iの本から、2, 3, 4, 5, 8, 14, 15, 16, 17, 18, の10話を抜粋して収録]。

III *Adventures of Tim Rabbit*, illustrated by A. E. Kennedy

(London, Faber and Faber Ltd., 1945 & republished by Puffin Books in 1978).

1. The Riddle-me-ree
2. Tim Rabbit finds a Garden
3. Tim Rabbit and the Bit-bat
4. Tim Rabbit and the Harvest Mouse
5. Tim Rabbit and the Slipper
6. Tim Rabbit's Handkerchief
7. Tim Rabbit goes Camping
8. Tim Rabbit and the Magical Bonnet
9. Tim Rabbit and the Fox
10. Tim Rabbit and the Shadow
11. Tim Rabbit's Sneeze
12. Tim Rabbit's Party

IV *Tim Rabbit and Company*, illustrated by A. E. Kennedy

(London, Faber and Faber Ltd., 1959).

1. Three Wise Owls
2. Tim and the Scarecrow
3. Birthday Presents
4. Tim and the Red Hen
5. Tim and Aunt Eliza
6. Nut-crack Day
7. The Little Windmill
8. Invisible Houses
9. Tim and the Snowman
10. Tim and the Cuckoo
11. The Ballon
12. Tim and the Spider
13. Nothing-At-All
14. The Little Grey Donkey
15. Journey to the Moon

V *Tim Rabbit's Dozen*, illustrated by Shirley Hughes

(London, Faber and Faber Ltd., 1964).

1. Tim and the Happy Old Gentleman

2. Visit to the Scarecrow
3. Tim and the Baby
4. Picking up Apples
5. Tim Rabbit and the Goose
6. Tim and the Night Watchman
7. Old Winter
8. The Oak Tree's Treasure
9. Tim Rabbit's Capture
10. Tim and the Glow-worms
11. The Christmas Tree
12. Tim Rabbit and the Wind

## B. 翻訳

- I 『チム・ラビットのぼうけん』, 石井桃子訳, 中川宗弥画,  
(童心社, 1967年)。

[AのIとIIIの本の中から選んだ, チム・ラビット, チム・ラビットとはさみ, チム・ラビットのうん, チム・ラビットとかかし, チム・ラビットのいえのがらすまど, チム・ラビットと三ばのカササギ, チム・ラビットのあまがさ, なぞなぞかけた, チム・ラビットとあかちゃんぐつの9話を収録]。

- II 『チム・ラビットのおともだち』, 石井桃子訳, 中川宗弥画,  
(童心社, 1967年)。

[AのIとIIIの本の中から選んだ, チム・ラビットみつばちをかう, チム・ラビットときつね, チム・ラビット月をさがしに行く, チム・ラビットきゃんぷにでかける, チム・ラビットとカヤネズミ, チム・ラビットとコウモリ, チム・ラビットとまほうのぼうしの7話を収録]。

## Tim &amp; Mrs Rabbit—4人の挿絵画家の仕事から

1)



1) illustrated by Alec Buckels  
*(The Adventures of No Ordinary Rabbit, p. 13)*

2)



2) illustrated by A. E. Kennedy  
*(Adventures of Tim Rabbit, p. 111)*

3)



3) illustrated by Shirley Hughes  
*(Tim Rabbit's Dozen, p. 44)*

4)



4) 中川宗弥画  
*(『チム・ラビットのぼうけん』 13頁)*